

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成27年度農作物病虫害発生予察情報について

平成27年度農作物病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

平成27年度農作物病虫害発生予報第12号

平成27年12月21日
徳 島 県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年より多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では, 発生圃場率が20.0%, 発病度は0.8であり, 平年(6.0%, 0.31)に比べてやや高めの発生である。
- (2) 12月17日発表の1か月予報では, 平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また, 気温は平年より高い, 降水量は平年より多い, 日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので, 肥培管理に注意する。
- (2) 多湿環境は発病を著しく助長するので, 施設内が過湿にならないように十分に換気を行なう。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く摘み取って, ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので, 薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に, 下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので, 発生を認めたら散布間隔を短縮して, 集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.4%, 発病度が0.1)。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が17.3%、発病度が3.8)。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(3)病斑は主に葉裏に形成されるので、薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(タバココナジラミ, オンシツコナジラミ)

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率は50.0%であり、平年(34.9%)に比べてやや高めの発生であるが、寄生葉率は1.5%であり、平年(3.9%)に比べてやや低めの発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

うどんこ病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率は16.7%であり、平年(9.8%)に比べてやや高めの発生であるが、発病葉率は0.2%であり、平年(0.7%)に比べてやや低めの発生である。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年

より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率は11.3%であり、平年(32.6%、5.4%)に比べてやや高めの発生である。
- (2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3)多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、発病果率が0.02%)。
- (2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4)多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(主に、タバココナジラミ)

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が1.7%であり、ほぼ平年(44.5%、3.0%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.8%、寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。ハダニ類はほとんど葉裏に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率は66.7%であり、平年(55.2%)に比べてやや高めの発生であるが、寄生葉率は8.5%であり、平年(9.7%)並の発生である。また、被害果率は0.8%であり、平年(0.7%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。ミナミキイロアザミウマはほとんど葉裏に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率は2.8%であり、平年(64.7%, 12.0%)に比べてやや低めの発生である。
- (2) 12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、発病果率が0.4%)。
- (2) 12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、発病葉率が0.2%であり、平年(39.0%, 3.1%)に比べてやや低めの発生である。
- (2) 12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラナ科野菜

黒腐病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや低い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が16.7%,発病度が0.2であり,平年(37.1%, 3.3)に比べてやや低めの発生である。

(2) 12月17日発表の1か月予報では,平年に比べ晴れの日が少ないと見込まれている。また,気温は平年より高い,降水量は平年より多い,日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期,または降雨前後の防除に努める。

(2) 害虫による食害痕は病原菌の進入経路となり発病を誘発するので,害虫駆除も適切に行なう。

(3) 被害株をそのまま放置しておく,次期作の際に伝染源となるので,圃場外に持ち出し適切に処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が83.3%,寄生株率が20.4%であり,平年(54.8%, 11.5%)に比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや少ない),発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が33.3%,10株当たりの幼虫及び蛹数が0.5頭であり,平年(13.6%, 0.3頭)に比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので,薬剤散布は葉の裏側を重点的に行なう。

(2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬レタス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.8%,発病株率が

0.1%)。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)圃場の排水をよくする。また、トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)収穫期には株元が繁茂して過湿となるので、発生しやすい。

(3)発病株は伝染源になるので、できるだけ早く除去する。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

菌核病

1)予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.1%、発病株率が0.9%)。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)発病株を放置しておくとも多数の菌核を形成して伝染源になるので、できるだけ早く処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が38.5%、寄生株率が3.1%であり、平年(12.6%、0.4%)に比べてやや高めの発生である。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難となるので、初期防除に努める。

冬春ハウレンソウ

べと病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が9.8%、発病度が0.8%)。

(2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)病原菌は被害株についたまま越冬し、春になると分生胞子を形成して伝染源となる。春先の発生を抑制するために、薬剤を予防的に散布して再発を防止する。
- (2)罹病株を圃場に放置すると、被害植物体内で形成された卵胞子が土中で越冬して、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。
- (3)葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので、肥培管理に注意する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率は83.3%であり、平年(32.7%)に比べてやや高めの発生であるが、発生程度指数は2.3であり、ほぼ平年(1.5)並の発生である。
- (2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難となるので、初期防除に努める。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が5.8%, 発病葉率が0.2%)。
- (2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3)罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.4%, 発病果率が0.1%)。
- (2)12月17日発表の1か月予報では、平年に比べ晴れの日が少なく見込まれている。また、気温は平年より高い、降水量は平年より多い、日照時間は平年より少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。

(2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、寄生株率が7.4%であり、ほぼ平年(28.9%、4.5%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が71.4%、寄生葉率が12.5%であり、平年(51.2%、7.1%)よりやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

II. その他

- ハウスやトンネル等で密閉保温していると、内部が多湿となり、発病に適した条件となります。晴天時の日中には換気を充分に行なうとともに、夜間は暖房機の温度を高めに設定して施設内の湿度低下を図ってください。
- 薬剤の使用に当たっては、必ず農薬ラベルに記載されている事項を遵守してください。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

平年比：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所
U R L : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

○病害虫の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。